

人称代名詞「僕」「君」の変遷

長崎靖子*

Historical Change of Personal Pronoun 'Boku' 'Kimi' in Japanese

Yasuko NAGASAKI

要 旨

本稿では、人称代名詞「僕」「君」に関し、①明治以前の「僕」「君」の使用、②明治以降の「僕」「君」の使用、③女性に対する「僕」「君」の使用の3点を、使用者、使用相手、使用意図を中心に観察した。

明治以前の資料では、「僕」は丁寧な言葉遣いとともに使用が見られるところから、謙称として使用されていたと考えられる。一方「君」に関しては、主君に対する使用や遊里の特別な使用は見られたが、現代的な用例は確認されなかった。明治に入ると、初期の資料では「僕」は謙称の用例とともに、対等の立場での使用が見られる。「君」に関しても、敬意を含んだ使用と対等な立場での使用が見られるようになり、現代の人称代名詞へ移行する過渡的な状況が確認された。明治半ば以降は、男性同士の対等の関係での「僕」「君」の使用の広まりが見られた。

男性の、女性に対する「僕」「君」の使用に関しては、明治前期にはまだ一般的ではない。「僕」は明治半ば以降、頻繁に見られるようになる。また「君」の使用は、明治の末年から大正の作品に確認されたが、用例はまだ少ない。女性に対する「君」の使用が広がるのは、大正末から昭和初期にかけて流行した「モダンボーイ」「モダンガール」という特殊な風俗の中での使用からと考えられる。

キーワード：人称代名詞、僕、君、女学生、モダンボーイ

*教授 日本語学

1. はじめに

現在、主として男性に使用されている一人称の「僕」、二人称の「君」は、江戸時代に武士同士の会話の中で使用され、明治以降、書生言葉を中心に広まり現在に至ったものとされている。小松（1973）では、坪内逍遙の『当世書生気質』（明治18～19年 1885～86）に見る「僕」「君」「たまへ」等を書生言葉の特色としてあげ、「書生言葉の特質はやがて知識人全体に及び、さらにそれ以外の人々にも拡大していった。」とする。しかし、明治以降の「僕」「君」に関しては、この小松（1973）の他はまとまった研究が見られず、具体的な使用に関しては不明な点も多い。そこで、本稿では次にあげる三つの項目を中心に、「僕」「君」の変遷を追うこととする⁽¹⁾。なお本稿では用例の引用部分以外は新字体を用いている。

- ①明治以前の資料の中に見る「僕」「君」の使用。
- ②明治以降の資料に見る「僕」「君」の使用。
- ③女性に対する「僕」「君」の使用。

2. 明治以前の資料に見る「僕」「君」

まず、①に関して観察する。『日本国語大辞典』（第二版 2000）によると、代名詞としての「僕」は「男子の自称。」とされており、語誌に関しては次のような解説が見られる。

漢文の中では、古代から男子の、非常にへりくだった表現として見られるが、訓読されるのが一般的であった。奈良時代の訓は不明だが、平安以後は「やつがれ」が普通。江戸時代の漢文から、「ぼく」の形で、対等もしくは目下の者に対する自称の代名詞として青年・書生などが使った。以後多用されるようになり、現代では、年齢に関わらず用いられるが、特に少年男子の自称として広く用いられる。また、子どもが自分を指して言うのを利用して、大人がその子に呼びかけるのに用いることもある。

これに対し、代名詞としての「君」は、「対称。敬愛の意をもって相手をさす。上代では、女性が男性に対して用いる場合が多い。中古以後は男女も用いた。現代語では、同等または目下の相手をさす男性語。」としている。その語誌に関しては

江戸時代に（略）口語的場面で謙称自称の「ボク」と対になり、武士階級同士で対等の立場で相手と呼ぶ語となった。これが明治時代の書生言葉に受け継がれ、現在まで主として男性語として対等もしくは目下の相手に対して用いられている。

とある。

人称代名詞「僕」「君」の変遷

以上の説明では「僕」「君」は、江戸時代に武士の口語の中で、対等の立場で使用されているとあるが、『日本国語大辞典』には武士の口語の用例は見られず、武士の言葉の中で、「僕」「君」がどのように使用されているかは不明である。江戸時代の武士の口語資料として知られる勝小吉の『夢酔独言』（天保14年 1843）においても、小吉は一人称に専ら「おれ」を使用している。『夢酔独言』にはその他、一人称では「わたくし」「わたし」「わし」「おら」、二人称では「あなた様」「あなた」「おまえ」「手前」「われ」「おのれ」などが見られるが、「僕」「君」の使用は見られない。

その他の資料を調べたところ、武士の用例ではないが、「僕」に関して幕末の滑稽本『妙竹林話七偏人』（以下『七偏人』、安政4～文久3年 1857～1863）の中で、次の用例が見られた。（以下用例の下線は筆者による）

七-1 大愚 アノ僕に聲をかけ給ひたるは、貴嬢でありやすかネ

七-2 大愚 僕が俳名をお呼びのからにやア、知らねへお人ぢやア有りやすめへが、何分思ひ出せやせん

七-1、七-2とも年増芸者に化けた虚呂松に対する言葉遣いである。大愚が使う一人称としては、他に「僕、下僕 小生」の表記で「やつがれ」の用例が見られる。

七-3 大愚 僕さへ他所で一才飲んでみたまでの事で、お恥もじながらまだ出所だに定かならねへのに、流石は大人だ、妙に何かがお早く集る

七-4 大愚 （略）下僕が今彼處の麥湯店の畔を過ると、傍なる床机に喜次郎大人、飛八大人、野良七大人の高嘶（略）

七-5 大愚 （略）小生は七大人のほかではげすが、ネヘモシ源兵衛の大人、御同然に是迄御突合もしてゐるもんでげすから（略）

大愚は「漢語まじりの釋らぬことを頻にならべ立てる」という学者ぶった人物である。「僕（ぼく）」の使用は、「かえ給ひたる」「ありやす」等丁寧な言葉遣いと共に使用され、また一人称「僕（ぼく）」に対して、大愚は芸者に化けた虚呂松に「貴嬢（きじやう）」という対称代名詞を使用しているので、この「僕（ぼく）」の用例は、へりくだった表現として使用されたものと考えられる。

一方、「君」の用例に関しては、歌舞伎台帳の武士の言葉遣いの中に、主君に対する「君」の呼びかけは見られたが、武士同士の対等関係での使用は見つからなかった。他に「君」に関しては洒落本『遊子方言』（明和7年 1770）の中に

遊-1 客 さあ／＼君たち、ちと呑給へ。あ、どれへさし上やうやら。

という用例が見られる。遊郭の客が、遊女に対し呼びかけた言葉である。この「君」の用例は前田勇編『江戸語の辞典』（1779）に収録されており、それによると「遊女。遊君。氣どった用語。」

とある。洒落本『通言総籙』（天明7年 1787）でも、帮間医者のしあんが

通-1 しあん しかし、夷狄(いてき)だも君(きみ)ありだよ

と「岡場所にもいい女がいる」という意味で「君」を使用しており、これらの使用は特殊なものであったと考えられる。

その他、江戸時代の資料として、幕末にヘボンが上海で刊行した和英辞書『和英語林集成』（初版 慶応3年 1867）を調べたところ、その中に「僕」「君」の見出しが見られた。

Boku, ボク 僕, n. A servant, also in speaking humbly of one's self, your. serbant, I.

Kimi キミ 君, n. Lord, master.

『和英語林集成』の初版では「僕」は、一人称の謙称と記述があるが、「君」には二人称の記載は見られない⁽²⁾。また「Yatszgare ヤツガレ 僕, pro. I」に関しては、「†」のマーク「word used only in books or obsolete」が付けられており、古い用語とされている。

以上、用例は少ないが、『七偏人』の「僕」にはまだ謙称の意味が見られ、また『和英語林集成』でも「謙称」とされているところから、江戸時代の「僕」はへりくだりの意識が強かったのではないかと考えられる。一方、「君」に関しては、主君に対する使用や遊女を指す言葉の用例が見られるだけで、対等関係での使用は見つからなかった。『和英語林集成』（初版）でも二人称の意味は書かれておらず、対等の間柄でどのように使用されていたかは定かではない。

3. 明治以降の資料に見る「僕」「君」の使用

次に②の点に関し、明治の小説、雑誌、新聞の記事から「僕」「君」を観察する。

3-1 明治初年に見る「僕」「君」

明治に入ると、「僕」「君」は小説、雑誌、新聞などに数多く見られるようになる。仮名垣魯文の『牛店雑談安愚楽鍋』（以下『安愚楽鍋』、明治4～5年）には次の用例が見られる。いずれも男性同士の使用である。

安-1 君牛肉は至極御好物とするさつのウ仕るが、僕ぼくなぞも誠実賞味いたすでござる。（鄙武士の獨益）

安-2 あのやうに唐紙たうし、扇面せんめんの攻道具せめだうぐでとりまかれては、さすがの僕ぼくもがっかりだ。

（生文人の會話）

安-3 ハイ、僕ぼくなぞも矢張やっばり因循家いんじゆんかのたちで、あまり肉食にくしよくはせなんだが一昨年いつさくねん大びやういらい以來、西洋家せいやうかに治療ぢりやうを受てからすこしづうけ、用もちひて見たら、終好つひすきに成なつて、當時たうしは三日用ひひ

人称代名詞「僕」「君」の変遷

ねば工合ぐあひがわるいやうぢやから、たうてん 當店からまいどり 毎度取よせてしやうしょく 常食どうやうにいたすテ。

(覆古の方今話)

安-4 ライ愚助ぐすけさん。君きみの処けんじの賢兒けんじはいくツになるネ。倅せがれはサ。○む、、、モウ九ツかネ。
それじよやア従來じうらいの弊へいを追おツて遊あそばせておいちやアいけねへヨ。僕ぼくが處とこの冢兒とんじもサ。

(新聞好の生鍋)

安-1の人物は、30歳ぐらいの汚れた紋付を着た田舎の武士で、言葉遣いにやたらに漢語を使用している人物である。「こちらのさむらひにむかひ」とあり、隣にいた侍に話しかける場面で「僕」「君」が使用されている。安-2は31,2歳の書画を嗜む文人で、同じ書画の会に出席した仲間に話しかけている場面である。安-3は40歳余りの「いづれの舊藩かの公用方とおぼしく」とあるので武士と考えられる。連れの町人と共に牛鍋屋を訪れている。町人は自称として「わたくし」を用いている。安-4は西洋かぶれの人物で、自分の博学を連れの男性に吹聴している場面である。この中で、安-1の「僕」「君」は、武士が初対面の武士に対して用いたものである。対等関係と考えられるが、言葉遣いの丁寧さから、「僕」にはへりくだり、「君」には敬意が見られる用例である。

『安愚楽鍋』と同時代のアーネスト・サトウの『会話篇』(明治5年)では、EXERCISE XXVに「僕」、EXERCISE XとXXVに「君」の使用が見られた。「僕」の用例は次のようである。

XXV-27 Sate boku mo kinnjitsu, Ozaka hen made hossokuitashimasu.

Tsukimashite wa rusu chiu kanai domo wo nanibun doka.

「君」の用例は、

X-50 Kimi no oboshimeshi wa ikaga de gozarimasu.

XXV-33 Kimi ni mo sekkaku o itoi nasaimashite

である。XXV-27は、武士と見られる人物同士の会話の中で⁽³⁾、「僕」は「hossokuitashimasu」という謙讓表現とともに、X-50, XXV-33の「君」は「oboshimeshi」「gozarimasu」「nasaimashite」という尊敬、丁寧表現とともに使用されている。また、『会話篇』のPART IIでは「僕」「君」に関し、EXERCISE Xの単語解説に次のように説明されている。

Kimi, lity. prince, used for the pronoun of the second person singular, especially among the educated classes.

「君」は、「especially among the educated classes (特に教養層で使用されていた二人称)」としている。「僕」に関しては

Boku (c), slave, is the corresponding pronoun of the first person

と説明が見られ、一人称での使用を明記している。謙称という解説はない。

明治初期の啓蒙雑誌である明六社の機関紙『明六雑誌』（明治7年 1874）では、第1号の西周の論文に「僕」が見られる。

明-1 僕が見るところ、拳世の通患にて、これ帰するところ賢智の寡く、愚不肖の衆くして、その勢衆寡敵せざるなり

但し、これは文語調の文の中での使用である。同文では「我輩」も使われており、他に第2号で「余のごとき」と「余」の使用も見られる。

以上の資料から明治初期の「僕」「君」は、武士の他、文人等の教養層の人称代名詞として使用されていることがわかる。武士の話し言葉に「僕」「君」が使われるようになったのは、謙称の意をもつ「僕」と敬意の意を持つ「君」の組み合わせが、武家社会の待遇表現としてふさわしいものであったからであろう。『安愚楽鍋』の**安-1**の用例や、『会話篇』の**EXERCISEXXV-27**の用例には、まだ「僕」にはへりくだり、「君」には敬意が見られる。しかし『安愚楽鍋』の**安-4**では、ぞんざいな言葉遣いの中でも用いられており、「僕」に見られたへりくだりや、「君」の敬意はうすれているようである。この「僕」「君」の待遇関係の変化と共に、明治以降は書生言葉の特色となり、やがて知識層から一般へと広がりを見せたものと考えられる。

3-2 女性が使う「僕」「君」に関する批判

漢文の読み下しの中で、男子の謙称として使用されていた「僕」と、その対として使用されるようになった「君」は、男性の使用する人称という意識があったようである。そのため、明治になり、女学生がその言葉遣いの中で「僕」「君」を使用することは批判的となった。明治8年の読売新聞の「○開化百馬鹿の四」と題された投書の中には、

(略)「君のお袴の紫はいゝ色ですねエ」「是は僕の伯父が商法を始まして先日一反僕に袴にいたせといつて投與されましたよ」(略)

(浅草奥山 曾我辰之 読売新聞 M.8.10.3 寄書)

という「学校娘(投書の記載による)」の会話が載っているが、使用する言葉は漢語まじりで、人称も「僕」「君」を使用している。男性と同じ言葉遣いをする女学生は、当時の新聞を賑わせている。読売新聞明治12年には、伯父に新年の挨拶をする少女の記事が見られる。

(略)伯父さんお目出とう新年の御慶を申し上げます「ヲ、お竹か大きく成つたノ今年は何歳に成つた「僕は七年十月に成ります「コレ、女の子が其様な生意氣な言葉を遣ふものではない七才なら七才八才なら八才と云ふものだ此節の子供は学校言葉ばかり遣ふからさッぱり分りやアしねエ(略) 一体僕といふのは何の事だ「僕といふのは私しといふ事

人称代名詞「僕」「君」の変遷

でございます「夫れでは矢張私しといふが宜い其様な符課を云ツては分らねエ（略）」

（幸堂得知 読売新聞 M.12.1.17 寄書）

学校に通う少女の使う「七年十ヶ月」という漢語に対し、その伯父が「女の子が其様な生意氣な言葉を遣ふものではない」とたしなめ、また、「僕」という一人称に対しても、「其様な符課を云ツては分らねエ」と批判している。女性が「僕」「君」を使うことを批判する記事として、読売新聞明治13年には次のような投書が載せられている。

○男子と生れるも女子と生れるも造物主の御意次第しかれども男は姿も詞もおのづから堅く女はどこまでも柔和なるが愛敬も有りおとなしやかにて宜いやうに思はれますが近年は熾んに女の漢學が流行にて島田齧や蝶々齧でいかめしく袴を着したる形は誠にはや見悪く従がッて言ふ詞が生意氣の漢語にて君僕などは聞ても胸が悪くなります（略）

（竹窓閑人 読売新聞 M.13.5.13 寄書）

新聞記事の他にも、『女学雑誌』第221号（明治23年 1890）に、女性の言葉遣いを批判する記事が載っている。

女性の言葉つき 破月子

（略）近來は大分女性の方々が御使ひなさる言葉のうちに暴々しひ、また丁寧でない、一種特別な聞き付けない、嫌な言葉が大分這入て來たようです（略）女子の方々が計りですと随分御賞め申すことが出来ません言葉を御使ひなさるようデス、

オヤ貴嬢よくきたノネー 私のおつかさんが 家のおとつさん、アライヤヨ、よくつてよ 何々ダワ、公園へ散歩に行く？（行くで切て仕舞て西洋風に語尾を上げる）君は…… 僕が…… 何々すべしダヨ アラマー本當？（これも前同様に語尾を上げる） ム、ン（イーエと云ふ言）

「女性の言葉つき」は『女学雑誌』の創始者巖本善治が書いたものである。「てよだわ」言葉と共に、女性が使うべからざる言葉として「僕」「君」があげられている。

これら、女性が「僕」「君」を使用することへの批判記事は、当時の人たちが、「僕」「君」の人称を男性の言葉であると意識していたことを物語るものであろう。

3-3 小説の中に見る女性の「僕」「君」

従って、明治の小説には、女性が一般的に「僕」「君」を使用するものはほとんど見られない。女性が「僕」「君」を用いる場合は、特殊な場面である。

『当世書生気質』（明治18～19年）では、牛鍋屋の女給のお豊が「僕」、芸者の辨吉が「君」を使う例が見られる。

当-1 お豊 ハ、、、。それでも貴君。どうで僕なんぞがリイベン〔戀着〕したつて無効
 ですものを。(お豊→繼原)

当-2 辨吉 ハア先刻承知ですヨ。サア／＼岸ちやんもお起きなさいヨ。口程にもない弱蟲
 たア君の事だ。(辨吉→岸辺)

当-1 は、女給のお豊が書生言葉を真似している場面である。「リイベン」という洋語も書生の言葉を真似たものである。それに対し書生の繼原は「何處の医學校の情人に教へて貰つた」と問い詰めている。当-2 は、芸者の辨吉が、酒に酔った書生の岸辺にふざけて「君」と呼びかけている。すぐあとに「サア／＼起給へ／＼」と「給へ」も使っており、やはり書生言葉を真似た場面である。

『浮雲』(明治20年)では、お勢が「僕」「君」を使用する場面がある。

浮-1 お勢 「ハア君の為に辯護したの。」(お勢→文三)

浮-2 お勢 「如何云ふつてアノー僕好きな同権論者はネアノー……」(お勢→昇)

浮-1 は、お勢が、役所を免職になった文三を罵る母親と議論したことを、文三に話している場面である。「僕の為に」という文三の問いかけに「君の為に」と答えている。普段お勢は文三に「貴君(あなた)」を使っており、「君」を使うのはこの場面だけである。「議論」という漢語の言い回しもあり、書生言葉を真似た言い方と考えられる。また、浮-2 は、お勢が昇とふざけて議論をしている場面である。数行前にお勢が「敢て一問を呈す」と述べている場面があり、やはりお勢が書生言葉を真似している様子が見られる。「僕」もその流れから使用されたものと思われる。お勢は通常は一人称に「私」を用いている。

この他に『女学雑誌』(2～6号)に掲載された巖本善治の「梅香女子の伝」(明治18年1885)の中(4号)に、書生言葉を使う女学生の「僕」「君」が見られる。

梅-1 田中 サウサネー然し君は此間だ活潑な才子は多く商人に爲て居るから卒業の後はソ
 ンナ人と協力して一事業を興し度とか言つたジャーありませんか(略)(田中
 →澤山)

梅-2 澤山 ナゼそんなに恐れ玉ふ誰れも入校の初はアンナものさ僕等イヤ妾等は之を導き
 て當世風にする義務がありますぜ(澤山→田中)

巖本は、この章のあとがきに「本章は固と學校の女生徒中に行はる、當世の風体を有の儘にせしまでにて其外に深き意あるにも非ず」と記しており、女学生の中には「僕」「君」を使う人物がいたことは事実のようである。しかし、ここで、「僕」「君」が見られるのは、「田中」「澤山」という女学生だけであり、また、仲間内の会話に限られている。

以上、小説に見られる女性の「僕」「君」の使用は、特殊な場面や、女学生の内々の会話に

見られるだけである。3-2に示したように、女性の「僕」「君」は批判の対象となる言葉遣いであり、一般的にはあまり行われなかったといえよう。

4. 女性に対する「僕」「君」の使用

4-1 朝日新聞の「キミ」言葉の記事

最後に③に関して観察する。少し時代は下るが、昭和13年10月4日の朝日新聞に、萩原朔太郎が「キミ」言葉」という題で、次のような投書を寄せた。(引用部の下線は筆者による)

文相は女學生のキミ・ボクを禁ずるさうだが、それよりもつと良風美俗を害するのは、男が女に對して使ふキミといふ言葉である。男が同性間で使ふ人代名詞を異性の女に對して使ふといふのは、男性それ自身が既に女性を中性視し、無意識の中に女を中性化するものである。

朔太郎がこのような記事を投稿した発端は、昭和13年、文部省が女學生の使う「僕」「君」を撲滅するという案を提出したことによる。この賛否を巡って当時新聞紙上で様々な論が展開されることとなるが、その論戦の中で投稿されたものの一つが、朔太郎の「キミ」言葉」であった。朔太郎は上記にあげた記事の続きに、

元來女の子をキミと呼ぶはじめの興りは、最初モダンボーイとモダンガールの間に流行した言葉ださうだが、轉じて喫茶店や珈琲店の客が女給を呼ぶ言葉となり、さらに普遍して今では一般の日本語にさへなっている

と書いている。モダンガール、モダンボーイは、「モガ」「モボ」と略される。米川明彦編『日本俗語大辞典』(2003)によると、「モガ」「モボ」は「大正末から昭和初期にかけて流行した、軽佻浮薄、享樂的な若い女性(男性)を指すことば」とある。朔太郎はこの「モガ」「モボ」の中で、女性に対する「君」の呼びかけが始まったとするが、実際にはいつ頃から女性に対して「君」が使われるようになったのであろうか。女性に対する「僕」の使用を含め、明治の小説を中心に調べてみることにする。

4-2 明治の小説に見る女性に対する「僕」「君」の使用

明治期の小説として8人の小説家の作品を選んで調査した。調査資料は以下の通りである。作家は、東京出身者を中心に選んだ。岡田八千代は広島出身であるが、母が江戸旗本の小栗信の長女であり、三歳のとき、母と兄(小山内薫)とともに東京に移り住んだことから、東京語の使い手と考えた。また坪内逍遙は美濃の生まれであるが、「僕」「君」に関して、その著書

である『当世書生気質』が必須資料と考え、調査した。

坪内逍遙『当世書生気質』（明治18～19年 1885～86）、二葉亭四迷『浮雲』（明治20～22年 1887～89）、三宅花圃『八重桜』（明治23年 1890）、巖谷小波『五月鯉』（明治24年 1891）、内田魯庵『くれの廿八日』（明治31年 1888）、夏目漱石『三四郎』（明治41年 1898）、國木田治子『破産』（明治43年 1901）、岡田八千代『三日』（明治44年 1902）⁽⁴⁾。

4-2-1 『当世書生気質』

『当世書生気質』では、芸者の田の字に対し吉住が「僕」を使用している用例が見られる。

当-3 吉住 「ライ／＼^た田のちやん^や行るべし／＼^{ぼく}僕が尻押^{しりおし}をしてやるから（吉住→田の次）

当-3 の吉住は「年^{とし}の比^{ころ}二十六七の好男子。官員^{かうだんし}とも見えず。商人^{くわんるん}ともつかぬ言語^み恰好^{あきうど}。まず素人^{しろうと}の鑑定^{かんてい}では、代^{だい}言^{げん}人^{にん}歟^かとおもはれたり。」と描写されている。いわゆる知識層の人物である。

これに対し、書生の小町田には、同じ田の次に対し「僕^{ぼく}といひ^ひかけしがわ^わたし^ただ^だつて」と言い直す場面が見られる。この言い換えの部分に関し、小松（1973）では「これを単に聞手が書生でないから言い直したと見るのは皮相であって、先に示したように書生以外の聞手に「僕」を使う例がないわけではなく、『浮雲』でも文三→お勢、勇→その母親で使われている。小町田の例は書生としての意識がここで保たれなくなった現れと解される。」とある。

小町田と芸者田の次は兄妹のように過ごした時期があり、兄妹としての関係が書生という立場より強く表れたものと思われる。小町田は、田の次に対しては「おまへ」を使用している。女性に対する「君」の使用は全編を通して見られない。

4-2-2 『浮雲』

『浮雲』の中で、男性の人称の使用を観察すると、文三と昇、また他の同僚という男性同士では「君」「僕」（昇は「我輩」を使っている）の人称が使用されている。女性に対して「僕」が使われている用例には、3-3 にあげたが、文三がお勢に使う場面がある。

浮-3 文三 僕の為に（文三→お勢）

浮-3 は、お勢が免職になった文三の為に母親と議論したという言ったことに驚き、思わず「僕」と使った場面である。また、お勢の弟の勇が母親に「僕」を使っている用例も見られる。

浮-4 勇 家^{うち}へ往つたら……鍋に聞いたら、文さんばツかだツてツたから、僕ア……それだから……（勇→母親）

浮-4 は勇が母親に小遣いをねだる場面であり、母親に対する子どもとしての使用と考えられる。勇は、年長の文三に話す際にも「僕」「君」を使用しているが、文三に対する「僕」「君」

の使用は、少年が背伸びをして書生言葉を真似ている中で表れたものであり、母親に対する「僕」も、文三に対する「僕」も一般的な男性の使用とは異なるものと考えられる。そのほかには女性に対して「僕」の使用は見られず、また「君」の使用もない。文三はお勢に一人称は「私」、二人称は「貴嬢（あなた）」、昇は一人称は「私」と「我輩」、二人称は「貴嬢（あなた）」を使用している。お政に対しては、文三は一人称は「私」、呼びかけで「叔母さん」、昇は一人称は「我輩」、呼びかけで「叔母さん」を用いている。ここでは文三がお勢に一般的に使う人称の用例をあげておく。

浮-5 文三 ^{ほんたう}眞實なら尚ほ嬉しいが、しかし^{わたくし}私にゃア^{あなた}貴嬢と親友の交際は到底出来ない（文三→お勢）

4-2-3 『八重桜』

『八重桜』では、男性同士の使用として、松本の令嬢時子の婚約者時任秀俊が、時子の慕う松浪薫に対し「僕」「君」を使用している。松浪から秀俊への使用は見られない。また、秀俊の弟秀之が、秀俊に対して次のように話す場面も見られる。

八-1 秀之（略）どうも僕……^{ぼく}吾儕は^{あたし}貴兄^{あなた}の^{びやうこん}病根がさツぱり^し知れない（略）（秀之→秀俊）

八-1 は秀之が時子との縁組が破談になり塞いでいる秀俊を慰めている場面である。秀之は兄に対し「です」「ます」調の丁寧な言葉を用いており、その言葉遣いの中で「僕」を「吾儕（あたし）」に言い直している。秀俊に対する二人称は「貴兄（あなた）」である。一方、秀俊は秀之に対し、「吾儕（わたし）」を使用している。秀之に対しての二人称は見られない。秀之が「僕」を「吾儕（あたし）」と言い直したのは、『当世書生気質』の小町田と田の字との関係と同様、兄弟という間柄からであろうか。『八重桜』では、女性に対しては「僕」「君」は使われていない。八-2 では秀俊は八重に「私（わたし）」「貴嬢（あなた）」を使用している。

八-2 秀俊（略）^{あなた}貴嬢も種々^{いろ／＼}お苦勞な^{くろう}さツて居らツしやる^{こと}事は、^{わたし}私も能く知ツて居ますが、（秀俊→八重）

4-2-4 『五月鯉』

『五月鯉』では、主人公酒井光一は、書生の谷や田崎に対しては「僕」「君」を使っている。女性に対しては、「僕」「君」の使用は見られない。世話になっている畑山の娘錦子に対しては「私（わたくし）」、「貴嬢（あなた）」、「あなた」を使っている。

五-1 光一 あなたはもう御存知じでしやう（光一→錦子）

五-2 光一 ^{じつ}實は^{わたくし}私が^{そんごう}籠想したのです……（光一→錦子）

また妹のお露には「私（わたし）」（妹には対称代名詞の用例は見られない）を使っている。

五-3 光一 私はお友達^{ともだち}の處^{ところ}へ行^{いっ}てたんだ（光一→お露）

4-2-5 『くれの廿八日』

『くれの廿八日』では、主人公純之助は、友人の男性に対しては「僕」「君」を使用している。妻のお吉や女中に対しては「乃公（おれ）」「お前（おまい）」を使用し、静江に対しては「僕」「貴嬢（あなた）」を使用している。

廿八-1 純之助 僕は^{やっぱり}一矢張嫌ひかネ。（純之助→静江）

廿八-2 純之助 其處が考物だ。^{あなた}貴嬢だツて生涯獨身でもゐられまいし。（略）（純之助→静江）

この他、純之助とお吉の仲人を勤めた高橋という人物がお吉に話しかける場面があるが、一人称は「あつし」、お吉に対しては「貴婦（あなた、あんた）」を使用している。「君」の使用は女性に対しては見られない。

4-2-6 『三四郎』

夏目漱石の『三四郎』では、三四郎、野々宮、与次郎は互いに「僕」「君」を使用している。広田先生も、三四郎、野々宮、与次郎に対し「僕」「君」を使用している。女性に対しては「僕」の用例は見られるが、「君」は見られず、「あなた」を使用している。

三-1 三四郎 じゃ何を見ているんです。ぼくにはわからない。（三四郎→美彌子）

三-2 野々村 どうです里見さん、あなたの所へでも^{いそろう}食客に置いてくれませんか（野々村→美彌子）

三-3 三四郎 あなたが里見さんの所へお移りになるというのは本当ですか（三四郎→よし子）

4-2-7 『破産』

『破産』では、登場人物の男性は同等の相手に対しては、「僕」「君」を使っている。関係に上下がある場合は、目下に対しては「僕」「君」、目上に対しては「私」「貴方」が一般的である。男性から女性への使用では、岡村は妻の常子に対し一人称は「僕」「己（おれ）」「私」を使用している。二人称は「お前」である。他の男性は常子に対し、一人称は「私」、親しい場合は「僕」、二人称は「貴方」を使用する。常子の子どもで6歳になる虎雄は常子に「僕」を使用している。これは、男の子の使用と考えられる。また、岡村には、岡村家に身を寄せている梅子

人称代名詞「僕」「君」の変遷

に対して「僕」「貴様（あなた）」の使用も見られる。女性に対する「君」の使用は見られない。

- 破-1 田中 貴方の處の社へお貸し、ただけの廣告料が戴だけなければ其れだけは私の社の損なのですからねエ（田中→常子）
- 破-2 西尾 併し僕等が今日岡村君が遊んだと、言つたなど、貴方歸つて言つては否ませんよ、（西尾→常子）
- 破-3 岡村 マア、己の言ふ事を聞け、お前は薄々聞いて知ってるだらうが、（岡村→常子）
- 破-4 岡村 お前は始終竹原の事を心配して居るが、心のうちは知らず、今の處僕の為に働いて居るのだから、（岡村→常子）
- 破-5 岡村 お前私の代りに三浦さんの處へ行つて、示談になるやうな手続きをお頼みしておいで（岡村→常子）
- 破-6 岡村 貴様のお父様にまで、ご心配をかけるのは僕も實に忍びん處ですが、（岡村→梅子）

4-2-8 『三日』

『三日』では、男性同士の「僕」「君」の使用が、主人公かな子の夫（名前は不明）と、その同僚らしき山根の間で見られる。夫は、かな子に対しては「己（おれ）」や「僕」を使用しており、二人称では「お前」のほか「君」が見られる。調査した明治の小説の中では、初めて女性に対して「君」の例が見られる資料である。一方かな子は夫に「私（わたくし）」「貴方（あなた）」を使用している。

- 三日-1 夫（略）とにかく己も一處に出かけるつて山根に約束したんだからね、今さらお前まえにふられちや僕ぼくの名譽めいよに關するよ（夫→かな子）
- 三日-2 夫 オイ山根の細君さいくんも君きみには負けだよ。（夫→かな子）
- 三日-3 夫 好し／＼。けれども亦また今日けふから君きみの世界せかいさ。（夫→かな子）

以上、明治の小説から女性に対する「僕」「君」の使用を見てきた。男性が女性に対し「僕」を使用する用例は、『当世書生氣質』から見られるが、明治前期にはまだ用例は少ない。女性に対する「僕」は、明治半ば以降一般的になったようである。一方、女性に対し「君」を使っているのは、管見した資料の中では明治44年の『三日』だけに見られた。この用例は、夫が妻に対して使用したものであり、朔太郎のいう「モダンボーイ」の「モダンガール」に対する使用より以前に、女性に「君」が使われていたことが知られる。

4-3 大正以降の小説に見る「僕」「君」の使用

大正時代の作品では、夏目漱石の『明暗』（大正5年）、有島武郎の『或る女』（大正8年）、武者小路実篤の『友情』（大正8年）、谷崎潤一郎の『痴人の愛』を調査した。『明暗』では、主人公の津田は男性の友人には「僕」「君」、妻のお延には「おれ」「お前」、結婚前の恋人の清子には、「僕」「あなた」を使用している。女性に対する「君」の使用は3例見られ、いずれも、看護婦に対して用いられている。

明-1 津田 君、こいつを一つ持ってくれたまえ。（津田→看護婦）

明-2 津田 君の国はどこかね（津田→看護婦）

明-3 津田 じゃこれから君の事を栃木県、栃木県って呼ぶよ。いいかね。（津田→看護婦）

『或る女』では、古藤は葉子に対し一人称は「僕」、二人称は「あなた」を使用している。女性に対する「君」の使用は見られない。

或-1 古藤 僕が好きというんじゃないけれども、あなたはなんでも人と違ったものが好きなんだと思ったんですよ。（古藤→葉子）

また、『友情』では、野島、小宮山等、男性同士では「僕」「君」が一般的に使われているが、杉子や武子に対しては、一人称で「僕」、二人称で「あなた」が使用されており、「君」の使用は見られない。

友-1 野島 杉子さん、あなたは自分をあざむいているのですよね。あなたの心はきっと神を求めているらっしゃる。（野島→杉子）

『痴人の愛』ではナオミの夫、河合譲治は、ナオミを「ナオミちゃん」「お前」と呼んでいるが、ナオミの友人浜田は、ナオミに「君」を使っている。

痴-1 浜田 この暑いのによく来てくれたね、——君、済まないが扇子を持ってたら貸してくれないか、何しろどうも、アシスタントもなかなか楽な仕事じゃないよ。（浜田→ナオミ）

浜田は19歳ほどの若者で、その様子は「白地緋の単衣を着て、ヤンキー好みの、派手なりボンの附いている麦藁帽子を被って、ステッキで自分の下駄の先を叩きながらしゃべっている、緒ら顔の、眉毛の濃い、目鼻立ちは悪くないが満面ににきびのある男。」と描かれている。「派手なりボンの附いた麦藁帽子」あるいは「ステッキ」をもつ姿は、大正末から昭和初期にかけて流行した「モダンボーイ」の様子そのままである。新聞に見る朔太郎の記述は、このような人物の会話の中で、女性に対する「君」言葉が流行したとする。浜田はナオミに対しては「君」を連発するが、他の女性に対しては「君」の使用は見られない。「君」という呼びかけは、いわゆる「モダンガール」であるナオミに対して、特別に使ったものであろう。

朔太郎の投書と同時期の、岡本かの子著『巴里際』（昭和13年 1938）では、女性に対して次のような「君」の使用が見られる。淀島新吉という主人公が、パリであったリサという「遊び女」に話しかける場面である。

巴-1 新吉 君もあの時分は元気だったなあ。（新吉→リサ）

新吉は、パリの魅力に憑かれ、故国へ還ることを忘れた「追放者」と呼ばれる外国人の一人であり、いわゆる大正末、昭和に流行した「モダンボーイ」に属した人物といえよう。女性に対する「君」の使用は明治末年にすでに見られるが、このような「モダンボーイ」の使用が、女性に対する「君」の使用拡大に影響を及ぼしているのではないだろうか。戦後の三島由紀夫の『永すぎた春』（昭和31年 1956）になると、一般の恋人同士の会話の中で、男性が女性に対して「君」を使用する用例が見られる。

永-1 郁雄 どうして君は僕の勉強の邪魔をするんだ。こんなに僕ががまんしてるのがわからないのか（略）（郁雄→百子）

5 まとめ

以上、明治以降の「僕」「君」の使用を観察した。男性同士では「僕」「君」の使用は早い時期から一般化されており、同等あるいは上から下へという関係の中での使用が見られる。一方、女性に対する使用に関しては、明治前期の作品の中では「僕」は限られた人物、限られた場面のみ見られるが、明治半ば以降には一般的に使用されていたことが確認できる。「君」に関しては、女性に対する使用は、明治末まで見られない。明治44年の『三日』の中では、妻に対して夫が「君」を用いている用例があり、大正5年の『明暗』では、主人公の男性が看護婦に対して使用した用例も見られる。しかしこの時期はまだ、女性に対する「君」の使用はあまり見られず、一般的ではなかったと考えられる。

大正末年になると、朔太郎の投書に見られるように、『痴人の愛』の「モダンボーイ」「モダンガール」と呼ばれる特殊な風俗の間で、女性に対する「君」の使用が行われている。以降、一般にも広がりを見せていったと考えられる。現代では、女性から男性に対しての「君」も、上司と部下というような上下関係がある場合には使用されている。

6 おわりに

「君」という人称は、現代では、気取った、あるいは尊大な呼びかけと考えられるせいか、

一般的に使用が減少しているようである。同等関係では、学生同士で、「お前」の呼びかけはまだ残っているが、どちらかといえば、名前で呼びかける方が多い。土屋（1984）では、現代の言語生活の中では、一人称代名詞、二人称代名詞自体が退化しているとし、それが会話の場の減少から生じているのではないかと述べている。そして、その結果、呼びかけの言葉としては、地位・関係を表わす普通名詞が一般化されているとする。

日本の人称代名詞は他の言語に比べ、様々なバリエーションが見られる。特に江戸時代の滑稽本、人情本をみると、そのバラエティーの豊富さに驚かされる。しかし、現代では使用する人称代名詞は固定化され、しかも実際の言語生活の中ではその使用は減少しているようである。互いの人間関係を示す役割を担ってきた人称代名詞の退化は、現代社会における人間関係をいかに映し出しているのであろうか。今後は、人称代名詞と社会との関係に関してさらに考察を進めたいと考えている。

注

- (1) 調査資料の詳細は後述する。
- (2) 『和英語林集成』二版（1872年）でも、「君」に二人称の記載は見られないが、三版（1886年）では「Kimi Load; prince; sovereign; gentleman; you (politely); master」とあり、丁寧な二人称とされている。
- (3) 小松（1985）では、この用例に関し、「サムライクラスの「僕・君」と述べている。
- (4) 注（1）と同様、調査資料の詳細は後述。

参考文献

- 小松寿雄, 1973, 「『三蔵当世書生氣質』の江戸語的特色」, 『埼玉大学紀要』, 第9巻, 17-28頁
小松寿雄, 1975, 「後期江戸語の武家の言葉」『国語と国文学』62巻, 5号, 33-45頁
土屋信一, 1984, 「人称代名詞と呼びかけの言葉」『暮らしの美意識』124-140頁
『日本国語大辞典』第二版 2000 小学館
前島勇編『江戸語の辞典』1979 講談社
米川明彦編『日本俗語大辞典』2003 東京堂出版

調査資料

- 「夢酔独言」『勝海舟全集』別巻 1994 講談社
「妙竹林話七偏人」『花暦八笑人 滑稽和合人 妙竹林話七偏人』1918 有朋堂

人称代名詞「僕」「君」の変遷

- 「遊子方言」「通言總籙」『古典文学体系 47』1971 岩波書店
『和英語林集成』（一版）復刻版 1966 北辰,（二版）複製版 1970 東洋文庫,（三版）復刻版 1974 講談社
「牛店雑談 安愚楽鍋」『日本近代文学大系 1』1970 角川書店
『会話篇』I II 復刻版 1967 東洋文庫
『明六雑誌』岩波文庫
「当世書生気質」『明治文学全集 16』1969 筑摩書房
「浮雲」『日本近代文学大系 4』1971 角川書店
「八重桜」『明治文学全集 81』1966 筑摩書房
「五月鯉」『明治文学全集 20』1968 筑摩書房
「くれの廿八日」『明治文学全集 24』1978 筑摩書房
「三四郎」『日本近代文学大系 26』1972 角川書店
「破産」『明治文学全集 82』1965 筑摩書房
「三日」『明治文学全集 』1965 筑摩書房
「道草」『日本近代文学大系 27』1974 角川書店
「或る女」『有島武郎作品集』第1巻 1951 創元社
「友情」『日本近代文学大系 32』1973 角川書店
「痴人の愛」『谷崎潤一郎全集』第10巻 1967 中央公論社
「巴里祭」『岡本かの子全集』第4巻 1974 冬樹社
「永すぎた春」『三島由紀夫全集 (12)』1974 新潮社
『明治の読売新聞』1999 読売新聞社
『朝日新聞戦前データベース』2001 朝日新聞社
『郵便報知新聞』復刻版 1989-1993 柏書房
「梅香女子の伝」『女学雑誌』複製版 1966-1967 臨川書店